様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：２５２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ２０７２５

研究課題名（和文）専門職としての自信の特性を活かした新任保健師の現任教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the continuing education program using the characteristics of professional confidence for novice public health nurses.

研究代表者
小川　智子（Ogawa, Tomoko）

島根県立大学・看護栄養学部・助教

研究者番号：５０５５１７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、保健師の専門職としての自信の構造を明らかにして、その構造を包含する現任教育プログラムを開発して効果を検証した。その結果、保健師の専門職としての自信は、「発展的な公衆衛生看護活動」「現任教育での主体的な学習」「専門職としての根拠に基づく実践」「キャリア形成における職場環境」の４因子を有する構造であった。本研究で開発した現任教育プログラムは、保健師の実践力への有益性が示唆された。しかし、自信を高める教育プログラムを開発するためには、教育方法を更に検証する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究における専門職としての自信の構造と関連要因の明確化は、保健師が実践において自信を高める要因を明らかにするとともに、専門職としての自信が保健師の実践能力の向上だけでなく、バーンアウトを予防するといったキャリア形成に肝要な概念であることを明らかにした。本研究で実施した現任教育プログラムは、保健師の実践力を育む現任教育への有益性を示した。保健師の現任教育の充実は、複雑化多様化する地域住民の健康課題を解決する保健師活動に寄与する。

研究成果の概要（英文）：In this study, we clarified the structure of professional confidence in public health nurses and developed the continuing education program including the structure and examined the effect. As a result, professional confidence of public health nurses was the structure with four factors: developmental public health nursing activities, active learning in continuing education, practice based on the evidence of the profession and workplace environment in career development. This education program for this study was useful for improving the practical skills of public health nurses. But, to develop an educational program that increase professional confidence, it is necessary to further examine the teaching method.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：保健師　専門職としての自信　現任教育　教育プログラム　キャリア形成

１．研究開始当初の背景

近年，医療制度や社会保障制度をめぐる衛生行政の法改正が相次ぎ，それに伴う保健師の分散配置が進んでいる．活動領域の拡大により，専門性への期待が高まる一方で，従来の保健師活動の特徴であった同じ部署内での活発な意見交換や情報交換の機会が減少している．こうした状況は，職務に対する不安や戸惑いを安易に相談できる環境になく，自信をもった職務遂行を難しくしている．保健師の実践能力の向上や職業的アイデンティティの確立には，保健師の自信が関連することが明らかにされており（佐伯ら，2004：根岸ら，2010），地域住民への質の高いサービスを提供するためにも自らの実践を信じて活動することは重要である．保健師の専門職としての自信を明らかにして，自信を高める現任教育は，保健師の実践力を育む新しい現任教育として期待できる．

２．研究の目的

本研究の目的は，保健師の専門職としての自信の構造とその関連要因を明らかにし（研究１），自信の構造を包含する現任教育プログラムを開発してその効果を検証することである（研究２）．

３．研究の方法

１）研究１

全国の 107 自治体を無作為に抽出し，抽出された行政機関の常勤保健師 1,512 名を対象に無記名自記式アンケート調査を実施した．調査項目は，和英文献のシステマティックレビューに基づき自作した専門職としての自信（34 項目），関連要因として，基本属性（性別，年齢，経験年数，所属機関等），性格に由来するとされる自尊感情（大芦，2014），事業・社会資源の創出に関する保健師コンピテンシー評価尺度（塩見ら，2009），バーンアウト尺度（久保，2007）等である．自信の構造は，探索的因子分析によって明らかにするとともに，関連要因は，相関分析，一元配置の分散分析等により分析した．統計解析には，SPSS20.0J for Windows を用い，有意水準は，$p<0.05$ とした．

２）研究２

①研究デザイン

本研究は，介入研究であり，教育プログラムに参加した保健師のうち，自らの事例を事例検討において提供して省察的実践を実施した介入群（３名）と，教育プログラムには参加するもの事例を提供しなかった対照群(２名)の２群を比較する事前事後テストデザインである(図)．

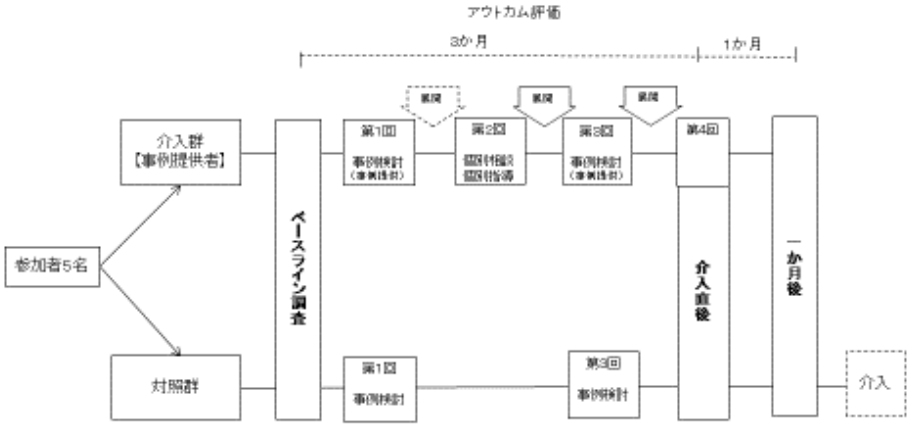

図 介入研究のデザイン

②教育プログラムの概要

参加者が個々に実践で抱えている困難事例について１グループ６名程度のグループワークによる事例検討を月１回程度概ね３か月間実践を内省し，課題解決方法を実践する（省察的実践）を主とする教育プログラムである．研究１の結果から，保健師が専門職としての自信を獲得するためには，「発展的な公衆衛生看護活動」「現任教育での主体的な学習」「専門職としての根拠に基づく実践」「キャリア形成における職場環境」の４要素が必要であることから，事例検討には，４要素を取り入れた事例検討シートを開発して活用し，インシデント・プロセス法に基づき実施した．

③教育プログラムへの効果の検証

３か月の教育プログラムの事例検討において事例を提供して省察的な実践を行った保健師（介入群）と，非事例提供者であった（対照群）の２群間の専門職としての自信の合計平均得点の経時的変化の比較と教育プログラムに参加することによって得た学びや気づきを質的記述的分析し，介入群と対照群で比較検討した．

４．研究成果

１）研究１

保健師の専門職としての自信は,「発展的な公衆衛生看護活動」「現任教育での主体的な学習」「専門職としての根拠に基づく実践」「キャリア形成における職場環境」の４因子 17 項目（Cronbachα＝0.934）で構成されていることを明らかにした．また，下位概念である「発展的な公衆衛生看護活動」と「専門職としての根拠に基づく実践」の得点は，経験年数 10 年以下の保健師が，それ以外の保健師と比較して有意に低く（$p<0.05$），経験年数が 10 年以上では，有意な差がみられなかった．このことから，保健師が専門職としての自信を高めるためには，経験年数 10 年以下の保健師を中心に,公衆衛生看護活動の発展に向けて根拠に基づく実践を蓄積する経験型学習の重要性が明らかになった．

専門職としての自信と関連要因である自尊感情，事業・社会資源の創出に関する保健師コンピテンシー評価尺度，バーンアウト尺度を比較検討したところ，自信は，コンピテンシーとは正の相関関係（ｒ＝.548）を示し，バーンアウトとは負の相関関係（ｒ＝-.400）を示した．自尊感情とは，相関関係はみられなかった（ｒ＝-.033）．このことから，保健師の専門職としての自信は，個人の性格による影響を受けない実践に基づく確信であり，実践能力の向上だけでなく，バーンアウトの予防といった保健師のキャリア形成に肝要な概念であることが示唆された．

２）研究２

教育プログラム受講者全員の平均自信得点の経時的な推移は，受講前 70.6 点，受講後 69.6 点，受講１か月後 73.4 点であった．介入群と対照群の自信の全体得点および因子毎の合計得点の経時変化を表１に示した（表１）．専門職としての自信の合計得点の平均は，介入群は，介入前と介入後，介入１か月後では変化がみられなかったものの，対照群では，介入前から介入後，１か月後と上昇していた．

表１　自信得点の推移

		介入前	介入後	１か月後
専門職としての自信の合計得点	介入群	69.3	69.3	69.3
	対照群	72.5	73.5	79.5
因子１：発展的な公衆衛生看護活動	介入群	21.3	21.3	20.0
	対照群	21.0	23.0	23.5
因子２：現任教育での主体的な学習	介入群	19.7	19.7	20.7
	対照群	21.0	21.0	23.0
因子３：専門職としての根拠に基づく実践	介入群	15.7	15.7	16.3
	対照群	16.0	15.0	19.0
因子４：キャリア形成における職場環境	介入群	12.7	12.7	12.3
	対照群	14.5	14.5	14.0

プログラムに参加することによって得た学びや気づきの質的記述的分析では，介入群では，自らの事例を実際に事例検討で提供することによって,「事例の情報と課題の整理」を行い,「公衆衛生看護技術の明確化」を図るとともに,「新たな知識の獲得」や「支援にあたっての多角的視点」を養い，更なる「実践や事例検討への意欲」につなげていることが明らかになった．また，事例検討では事例を提供しなかった対照群でも，事例提供者の事例と自分が担当する「類似ケースとの照合」を図りながら，その事例の「課題の明確化」を行って,「新たな知識の獲得」や「支援にあたっての多角的視点」を養っていた（表２）．

表２：気づきや学びの質的記述的分析

	カテゴリ	サブカテゴリ
介入群	事例の情報と課題の整理	情報の整理
		課題の明確化
	公衆衛生看護技術の明確化	アプローチ方法の明確化
		個の健康課題を地域の健康課題との関連
	新たな知識の獲得	事例検討の方法の修得
		制度の理解
	支援にあたっての多角的視点	支援にあたっての多角的視点
	更なる事例検討への意欲	職場での実践
		人材育成での活用
対照群	類似ケースとの照合	類似ケースとの照合
	課題の明確化	課題の明確化
	新たな知識の獲得	事例検討の方法の修得
		制度の理解
	支援にあたっての多角的視点	支援にあたっての多角的視点

質的記述的分析結果から，本プログラムは，介入群だけでなく，事例を提供しなかった対照群の保健師の実践力の向上にも効果が得られていると考えられる．しかし，自信につながる現任教育プログラムを開発するためには，研修会の開催時期や方法，回数など参加しやすいといった教育方法の更なる検討が必要である．

＜引用文献＞
①大芦治(2014)：自信についての心理的考察，児童心理，1(979)，11-17.
②久保真人：日本版バーンアウト尺度の因子的，構成概念妥当性の検証，労働科学 83（２），39-53，2007.
③佐伯和子，和泉比佐子，宇座美代子，他（2004)：行政機関に働く保健師の職務遂行能力の発達　経験年数群比較，日本地域看護学会誌，7(1)，16-22.
④塩見 美抄，岡本 玲子，岩本 里織（2009)：事業・社会資源の創出に関する保健師のコンピテンシー評価尺度の開発　信頼性･妥当性の検討,日本公衆衛生雑誌,56(６),391-401.
⑤根岸薫，麻原きよみ，柳井晴夫（2010)：「行政保健師の職業的アイデンティティ尺度」の開発と関連要因の検討．日本公衆衛生雑誌；57（1)：27-38.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　０件）
　現在，海外誌に投稿中である
〔学会発表〕（計　２件）
1）IARMM 6th World Congress of Clinical Safety，2017．9，The structure of professional confidence of public health nurses，Tomoko Ogawa，Hisae Nakatani，Akiko Kanefuji，Kiyoka Yamashita，Rome.
2）第 76 回日本公衆衛生学会総会，2017．11，行政保健師のバーンアウトに関連する要因，小川智子，中谷久恵，金藤亜希子，山下清香，鹿児島市.

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
研究協力者（１）
　氏名：今若　陽子
　ローマ字氏名：Imawaka Yoko
研究協力者（２）
　氏名：天野　和子
　ローマ字氏名：Amano Kazuko

※科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです．そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます．